『永遠の弁護者』 井上隆晶牧師

使徒言行録2章1～13節、ヨハネによる福音書14章15～20節

①【五旬祭、七週の祭りの意味するもの】

今日はキリスト教の暦で聖霊降臨祭です。ギリシャ語でペンテコステといいます。イエスが復活して50日後に約束された聖霊が使徒たちの上に降り、恐れていた彼らは、まるで別人のようになって大胆に伝道に出かけてゆきました。それを祝う日です。「五旬祭の日が来て」（使徒2:1）とあります。五旬祭というのは50日祭という意味で、過越祭から50日目に当たります。ユダヤ教三大祭りの一つで「七週の祭り」といいます。その日には三つの事が祝われました。（1）律法が与えられたことを祝います。（2）ルツとボアズが結婚したことを祝います。ルツは外国人でありボアズはユダヤ人ですが、この二人が結婚してダビデの先祖が生まれたからです。（3）第二の収穫である小麦の収穫を祝いました（第一の収穫は大麥）。この祭りの性質は、私たちに新しい約束のひな形であることを教えています。この日に神は、古い律法ではなく新しい律法を与えました。又、ユダヤ人も外国人もなく、新しい神の民が生まれました。そしてキリストを信じる民が起こされた（収穫された）のです。

②【神の息が新しい人の中に入り、神の言葉を語り出した】

「一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いてくるような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。」（使徒2:1～2）とあります。激しい風が吹くような音が天から聞こえて来ました。風と息と霊はギリシャ語では同じ「プネウマ」です。ヘブライ語では「ルアッハ」です。聖霊は神の息です。この神の息は、二回にわたって人間に与えられました。

最初の聖霊降臨は、復活の日の夜、現れたキリスト自身によって行われました。彼は弟子たちに息を吹きかけ「聖霊を受けよ」（ヨハネ20:22）と言われました。キリストの息が聖霊なのです。キリストの息を受けた弟子は、新しい人間、キリストの体として再創造されたのです。その日から弟子たちは、神の息を呼吸するようになりました。「イエスを死者の中から復活させた方の霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリストを死者の中から復活させた方は、あなたがたの内に宿っているその霊によって、あなたがたの死ぬはずの体をも生かしてくださるでしょう。」（ローマ8:11）聖霊が宿っているから私たちは復活するのです。人間の息が終わっても、神の息・キリストの息は終わらないからです。それは永遠に私の中で息をしています。だから私たちは死なないのです。

第二の聖霊降臨は、50日後に、聖霊自身によって行われました。それが今日です。「炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると一同

は聖霊に満たされ、霊が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話し出した。」(使徒 2 : 3~4) とあります。聖霊は一人一人にさまざまな賜物を分配し、とどまります。それは「炎の舌」という姿で現れました。神の舌という意味です。聖霊は弟子たちに主に語る力、宣教をさせる神の力を与えました。彼らは外国の言葉で神の偉大な業を語り出したのです。イエス様は「私は父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてください。」(ヨハネ 14 : 16) と言われました。イエス様は聖霊のことを「弁護者」といわれました。ギリシャ語では「パラクレートス」といいます。「パラ」というのは「共に」という意味で、「クレートス」というのは「叫ぶ」という意味です。私たちが神様のことを語る時に、一緒に語ってくださるのです。だから預言をしたり、宣教する時に一番現れるのだと思います。弁護者というのは宣教のための弁護なのだということが今回、分かりました。

このように二回の聖霊降臨が必要だったのです。ヨエル書にこう書いてあります。「主はあなたたちを救うために秋の雨を与えて豊かに降らせてくださる。元のように、秋の雨と春の雨をお与えになる。」「イスラエルのうちに私がいることをお前たちは知るようになる。」(ヨエル 2 : 23、27) 春の雨で芽が出て、秋の雨で実を結び収穫するからです。

③【聖霊によらなければ人は変わらない】

その出来事は「突然」起こりました。イエス様から弟子たちは、聖霊を送ると言う約束を聞いていましたが、いつその方が来るかは聞かされていませんでした。そのお方は、突然やってこられました。これがキリスト教の特徴なんです。神の出来事がまず先にある、それを体験して人間の中に信仰が生まれるのです。それは復活も同じです。弟子たちは本当に復活した人を「見た」のです。その体に「触れた」のです。神学は後からくるのです。聖霊降臨もまずは出来事として起こりました。キリスト教信仰とは、このように上からの働きかけ、神の現れなのであって、下からの私たちの運動ではないのです。だから基本的に、人間には「待つ」ことしか出来ないのです。信仰とは明けても、暮れても神が来てくださるのを待ち望むことなのだということが今年になってやっと分かりました。雨のことを考えてみてください。人間が雨を降らすことなどできますか。雲を湧きあがらせ、動かすことなど出来ないのです。いつその日が来るか分かりませんが待つのです。でも何もしないで待つではありません。弟子たちの様に祈って待つのです。祈りとは、こちらの受け皿を準備することです。聖霊は、一つになって集まり祈っている民の上に降りました。それ以外のエルサレムにいた人の上には降りませんでした。自分の心を柔らかな土地の様に、天からの雨を吸い込むようにするのは、そうすれば豊かな実りを結べます。コンクリートのような強情な心では、天からの雨はみんな流れて行ってしまいます。

●先日、友人の牧師から面白い話を聞きました。大阪大学のクリスチャンではないある学生がネパールに研修に行きました。彼は無宗教でした。ネパールでは信

仰を持っていない人は信頼されず、受け入れられないと言うのです。ネパールでは牧師は悪霊を追い出せないと成れないそうです。日本に戻って来たその青年は、キリスト教に非常に興味を持ち、学び始めたそうです。そして自分にも悪霊を追い出す力が欲しいと求めているそうです。

ネパール人の信仰は初代教会の信仰の特徴をよく表しています。それは力としるしと不思議な業です。学問ではありません。聖霊を持っている人の語る言葉と、聖霊を持っていない人の語る言葉は同じ言葉でもぜんぜん違います。聖霊を持っている牧師の言葉は、力と確信があり、腹の底にストーンと落ち、人を変える力があります。人を変えることができるのは神聖霊だけです。人間のどんな情も、話術も、少々の善意も、説得も、知識も、熱心な世話も人を変える事はできないのです。私はカルト宗教の説得をするとき、それを体験しました。どんな真実な資料も、親の涙も子どもたちを変える事はできませんでした。ただ聖霊が働いた時だけ、その人は脱会し、信者になりました。今の教団の救出活動は、知識です。一応脱会しますがキリスト教信者にはなりません。聖霊の力で説得するのではなく、人間の力で説得するからです。これが日本基督教団の決定的な問題です。ペトロがこの日、説教をただけで3000人もの人がキリストを信じ洗礼を受けました。彼は漁師です。学問などしたことはありません。人々は「大いに心を打たれ、…私たちはどうしたら良いのですか」（使徒2：37）と言ったとあります。これが聖霊の力です。学問ではなく聖霊です。エゼキエル書にはっきりとこう書いています。「わたしが清い水をお前たちの上に振りかけるとき、お前たちは清められる。…わたしはお前たちに新しい心を与え、お前たちの中に新しい霊を置く。わたしはお前たちの体から石の心を取り除き、肉の心を与える。また、わたしの霊をお前たちの中に置き、わたしの掟に従って歩ませる。」（エゼキエル 36：25、26～27）神だけが人を清くし、人を変えることができると言っているのです。

● 「シルワンの手記」という本の中にこんな記事が載っていました。

「この修道者は、特別に罪人と貧しい人が好きだったそうですが、ある日、彼は、一人の婦人から分厚い長い手紙を受け取りました。それには、この婦人の歴史が細々と書かれていました。そして最後に、これらのすべての罪の赦しを与えてくれるように、とありました。彼は手紙ではゆるしの秘跡を与えられない旨の返事を書いたのですが、いろいろな事情を考慮したあと、ふと思ひ直しました。そして一人の神父の所に行き、婦人が手紙に書いたすべての罪をまさに自分自身の罪として告白のです。婦人はある日、ある時に平安を取り戻しましたが、それはその修道者が彼女に代って罪を告白し、その赦しを得た時刻だったそうです。」

他人の罪を自分のものとして告白するとき、他者が変えられるという事があるのだということなのです。神の霊だけが、本当に人を変え、人を救うことができる事を忘れず、私達も聖霊を求め、聖霊の人にさせていただきたいと思えます。